

〈論文〉

## 夏目漱石の旅行記に現れた異文化への「先入観」

佟 若 瑤

【要旨】本論は明治42年に掲載された漱石の中国（中国東北部）旅行記——『満韓ところどころ』を手掛かりに、漱石の中国認識の形成を究明してみるものである。今までの研究には、旅行記における漱石の中国認識の植民地主義的な思想の有無についての論が多いが、本論では漱石の中国旅行を一異文化体験として考察し、それが漱石の異文化理解の形成にいかなる影響を与えたのか、漢文学の素養が高い漱石が植民地化されつつある中国を考察するときに現れた「先入観」とは何かを究明したいと思う。同時に漱石の中国体験による「中国理解」の性格を論じてみる。

【キーワード】先入観 異文化体験 「中国理解」の性格

明治42（1909）年秋、夏目漱石は中国東北部、朝鮮半島を旅行した。大学予備門時代の親友、当時南満洲鉄道株式会社（以下、「満鉄」と略称）総裁中村是公の誘いを受け、9月2日から10月17日まで、46日間にわたる旅であった。『満韓ところどころ』（以下、『満韓』と略称）はその時の紀行文で、同年10月21日から12月30日まで『東京朝日新聞』に、10月22日から12月29日まで『大阪朝日新聞』に、51回にわたって連載された。

『満韓』は51回に「まだ書く事はあるがもう大晦日だから一先ずやめる」という一言で終了したので、朝鮮半島での見聞はほとんど触れていない。こういう意味で、『満韓ところどころ』と題したこの紀行文は内容的に「満洲ところどころ」であり、漱石が中国の東北部を実際に旅行して書き残した紀行文であり、そこには漱石の中国認識を究明するのに重要な手掛かりが内蔵されていると思う。

『満韓』に関する評論は多数あるが、不評が目立つ。その中で、中野重治の「漱石以来」<sup>1</sup>をはじめ、『満韓』には中国人と朝鮮人に対する侮蔑的な言葉遣いと描写が散在することで、漱石の中国観に帝国主義・植民地主義的な考えがにじみ出ているものだとの指摘が多かった。また、最後まで書かれずに途中で不自然に中断されたという点に対して、連

載中断の背景には、植民地の風土人情および明治日本の植民地経営事業をありのままに紹介してくれなかったのが、客観的な知識性・有用性をもつ紀行文ではない点で、当時の「満州経営への参加を夢見る」読者層の成功への願望に応えられずに、中断せざるを得なかったということもある<sup>2</sup>。さらに、満韓旅行は漱石の個人趣味的な旅で、『満韓』の世界を描いた漱石の筆は、先進国知識人が植民地に向ける上からの目線に支えられているという評価もある。『満韓』は『漱石ところどころ』であるという小宮豊隆の指摘<sup>3</sup>に加え、吉田熙生氏の論考<sup>4</sup>では、明治知識人の、いわゆる初期ナショナリズム的な認識形態が『満韓』で展開されている、と論じられた。「漱石といふ男は人をばかにして居る」<sup>5</sup>といった当時『満韓』が受けた批評を、漱石が自ら述べたこともあるように、『満韓』は多岐に議論されている話題作でもある。一方、批判的な論に対して反論を試みる論考も多数出ている。それは『満韓』の言葉遣いなど表面的なことに対する批判に終わっていることに対して、おのおの異なる角度で漱石が植民地主義に陥っていたはずがないとの考えを展開する論である<sup>6</sup>。

こういった漱石の植民地主義的な情緒の有無をめぐる論考は、明治維新以来の日中関係の発展経緯の一側面を把握し、当時の日本民衆における大陸拡張政策と植民地に対する普遍的な態度を窺うことができ、漱石の中にある反戦的情緒や個人と国家との関係のありかたなどの思想を観察する良い材料でもある。同時に漱石の中国を見る目線の複雑さも痛感させられる。その複雑な目線から漱石の思想体系、当時の歴史的・社会的背景を読み取ることができ、異文化である中国文化に対する理解と誤解を引き起こした「異文化体験のあり方」を探求するのに『満韓』は格好な材料である。漱石の中国旅行を一異文化体験の実践として、漱石はいったいどのようなまなざしで中国と中国人を見ていたのか、彼が中国に出ていくときに何が起きたのか、そしてなぜ起きたのかといったことに注目すれば、漱石の中国観の真実に接近することができると思う。

## 1. 漢文学の世界に陥った「先入観」

### 1.1 中国との出会い——漱石と漢文学

漱石の中国文化との最初の接点として、まず彼が小学時代から学び始めた漢文学が挙げられる。漢文学の勉強を通して、文学的な素養が培われていたばかりでなく、漢籍から思想的な影響を受けて、一種の「中国趣味」的な価値観が漱石の中で確立されたのである。漱石は小学生の時代から漢文学に深い興味を示したが、後には単なる趣味にとどまらず、英文学研究の際には学問的な価値判断の座標の一つともなり、漱石文化論の枠組みにも

なっていたと考えられる。

『硝子戸の中』の三十一節に、漱石が小学時代の漢文学の勉強について、「私がまだ小学校に行つてゐた時分に、喜いちゃんといふ仲の好い友達があつた」<sup>7</sup>「喜いちゃんも私も漢学がすきだつたので、解りもしない癖に、能く文章の議論などして面白がつた」<sup>8</sup>と書いている。まだ小学生であった漱石がすっかり漢文学に惹かれて、漢籍の奥深さにはまだまだ難解なところが多かつたにもかかわらず、友達と漢籍の中の文章を評論することを楽しんでいたのである。

漱石は小学校を卒業してから当時の東京府立第一中学に入学したが、この中学校に二、三年在学したのち、国文学や漢学の教育で著名な二松学舎に転校したことからも、彼が漢学を好んでいたのがみてとれる。小宮豊隆氏の論考<sup>9</sup>によると、漱石が二松学舎で集中的に受けた漢籍講義には、中国の史書、唐宋詩詞、儒教の経書などがある。史書と唐宋文学の勉強を通して、漱石は中国の歴史、文学などの分野にわたる豊富な知識を身につけ、東洋的な文学のセンスをしっかりと培っていた。その上、『論語』『孟子』など儒教の經典から思想的な影響を受け、東洋的な価値観の基盤も形成され、漢学的な知識・思想体系が漱石の頭の中に深く根を下ろした。のちに、大学進学を目指して大学予備門に進学するために英語を教えてくれる成立学舎に転校し、大学、英国留学を経て英文学の研究者として世間に名が通つたにもかかわらず、漢文学を生涯一貫して勉強していたことは、漱石の漢籍蔵書からもうかがえる。

伊東貴之氏が行っている漱石の漢籍蔵書に関する研究<sup>10</sup>によると、「左国史漢」（『春秋左氏伝』『國語』『史記』『漢書』）に代表される伝統的・正統的な中国古典（経書と正史）のほかに、唐・宋・明・清代の漢詩文集、画帖・拓本、禪の語録の類を中心とする仏教や宗教関係の書籍のみならず、後述する満韓旅行との関係ある旧満洲及び朝鮮の歴史・地理の書籍も若干見られる。学校教育で触れた、当時日本の一般知識人の教養としていた中国の歴史、文学、儒教思想に関する書籍のほかに美術、宗教および近代中国事情などの類も備えていることから、漱石の中国に対する関心は一般的な範疇を超えて、多分野に涉っていることがわかる。

このようにして、漱石は少年時代に趣味で始めた漢文学の勉強を生涯にわたって熱心に続けていた。漢文学を通して漱石は一体何を得たのであろう。まず挙げられるのは、漱石の中国に対する好感である。妻の夏目鏡子が漱石の満韓旅行のお土産について述べた<sup>11</sup>ように、満韓旅行から帰ってきた漱石は、経済的にはあまり余裕がないものの、中国の特色ある玉・翡翠の飾り物を家族への土産とした。家屋内の装飾と用具も、漱石は中国で家具によく使われていた紫檀を偏愛し、紫檀で作った器具は日本の金・銀の粉をついた漆器

より上品だと思っていた。しかも、紫檀をはじめ、中国の物でさえあれば何でもいいと言うほど中国風の品物に熱中している。漱石の中国に対する愛好の深さは、「愛国心のない人だ」という妻の冗談からも感じられる。長年にわたった漢文学の薫陶によって得られた「支那趣味」をもって、漱石は中国的な美意識になじみ、それを日常の家庭生活においても十分に生かしたのである。

生活の隅々にも及んだ漱石の中国文化に対する興味と好感は、彼の漢文学の素養が個人的な趣味として表面化されたものである。その下地にあるのは、漢文学が漱石に与えた知的な涵養である。漢籍から得られた東洋的な文学教養は、英文学を研究するときの座標として、漱石の文学論の形成に大きな影響を及ぼしている。彼が有名な『文学論』の序において東洋文学と西洋文学との比較で論じた<sup>12</sup>ように、少年時代から学び始めた漢籍は、文学という定義を彼の頭の中に強く叩き込んだ。漱石はこの定義を文学一般の基準として強く主張している。そもそも東洋文学と西洋文学がそれぞれ違う風土・文化で生み出されたもので、統一的な基準で価値判断すべきではないが、漱石は東洋文学を大学一般の基準に認識して英文学の世界に入った。そして東西文化のギャップを肌で感じ、遂には「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」<sup>13</sup>と改めて論断し、とうとうこの東西の相違を乗り越えられず、「卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり」<sup>14</sup>「心中は甚だの感を催ふしたり」<sup>15</sup>などと愚痴をこぼしていた。そういう東西における文学定義に対する認識の格闘から見ても、漱石の漢文学に関する造詣は深いものであった。

## 1.2 中国像と漱石の問題意識

漢学に勤しんでいた漱石は、漢文学から思想的な影響を受けて東洋人としての人間性を確立していた。漢文学は漱石の生涯の趣味となり、日常生活の隅々にしみついているだけでなく、さらに彼の思想的な鎧となっている。その鎧は西洋文明の衝撃に面してもびくともせず、漱石の精神的な血肉になり、彼独自の文学論と文化観の成立に大いに役立ち、彼独自の中国像を作り上げた。それは『草枕』の冒頭に窺える。

（前略）ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか浮世の勤工場にあるものだけで用を弁じて居る。

いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理もない。うれしい事に東洋の詩歌はそこを解

脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。独坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月来相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如帰」「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、権利、義務、道德、礼義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすと寐込む様な功德である<sup>16</sup>。（『草枕』一）

ここでは東洋詩を用いて西洋詩およびそれに宿っている西洋的な文化論への批判をした。西洋の詩はいつも自由・正義・愛とか体裁のよいテーマをとって立派な話をしているが、詩人たちの着目点は「浮世の勤工場」など俗世の範囲から脱出できず、詩の中で描かれているのは人々の目の前で動きまわっている人・物・事ばかりで、結局人間社会の利益から自由にならない。東洋の詩といえば、少ない文字数からなっているものが多いが、洗練された語句をもって世間で見られない桃源郷を創り、読んでいる人々に俗世の重苦しさを忘れさせる効用がある。浅薄で功利的な西洋世界の価値観に対して、俗世を超越した中国文学は人々に自由闊達な精神的世界の趣を吟味させて楽しませるものだと、漱石は考えていたのである。

この『草枕』の後半で、漱石は、日本で事業に失敗して別れた妻からお金をもらい、中国に流れていく「那美」の元夫という人物像を作った。別れた夫の前途について「那美」は「御金を拾いに行くんだか、死に行くんだか、分りません」<sup>17</sup>と言った。このような人物像と冒頭の詩歌評論とを読み比べれば、近代化・西洋化された日本で行き詰まる人間は、東洋的な趣味を求めて中国に渡り、謎のままに居ることは、漱石の東西文化格闘の解消法であり、そのような縹渺たる世界とは、漱石の中国像でもあるのではないかと考えられる。こうした漱石における中国像は、単なる文学的な趣味に対する追求だけではなく、近代化途上で西洋化されつつある日本文明に対する批判も濃厚に見られる。それは作家夏目漱石が誕生する前の英国留学期間からすでに読み取れる。

明治33（1900）年9月、漱石は文部省の派遣により英国留学に出発した。2年間ほどの留學生活で、漱石は西洋文明の衝撃に直面して強い精神的なショックを受けた。西洋世界の東洋に対する自己優位的な立場に基づいた蔑視が大きな原因である。近代以来、経済的・物質的な発達を遂げた西洋社会は、自らの「先進性」をもって、「後進」地域だと決めつけた東洋社会に対して見下した視線を向けている。英国でそのような視線に直ちにぶつかった漱石は、英国における日本人と中国人の異なる境遇について、明治34（1901）

年3月15日の日記でこう書いた。

三月十五日 金

日本人ヲ観テ支那人ト云ハレルト如何、支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名誉アル国民ナリ、只不幸ニシテ目下不振ノ有様ニ沈淪セルナリ、心アル人ハ日本人とヨバルルヨリモ支那人ト云ハルルヲ名誉トスベキナリ、仮令然ラザルニモセヨ日本ハ今迄ドレ程支那ノ厄介ニナリシカ、少シハ考ヘテ見ルガヨカラウ、西洋人ハヤトモスルト御世辞ニ支那人ハ嫌ダガ日本人ハ好ダト云フ之ヲ聞キ嬉シガルハ世話ニナツタ隣ノ悪口ヲ面白イト思ツテ自分ガ景氣ガヨイト云フ御世辞ヲ有難ガル輕薄ナ根性ナリ<sup>18</sup>

当時英国における日本人と中国人のことについて、漱石はまた『倫敦消息』で「或る公園で男女二人連があれば支那人だいや日本人だと争つて居た」<sup>19</sup>と書いたこともある。当時の日本と中国の事情を比べてみれば、日本は明治維新を通して国内の各領域にわたる改革を成功させ、近代化がますます進行し、経済力と軍事力の急速な発展を遂げていた。明治維新による近代化の成功をもって、日本は西欧列強によって植民地化されないで済んだばかりでなく、自ら列強の列に入り、中国をはじめアジア諸国における植民地の開拓を始めた。日本とは対照的に、中国は列強の侵略によって植民地・半植民地化が深刻化する一方であり、国力がますます衰弱していた。漱石がこの日記を書いた一年前の1900年に、中国国内において「仇教」（キリスト教宣教師及び布教活動に対する反感）・排外運動を発端とした義和団事件が起こった。そのために、英国における中国人の評判が悪かったのも想定できる。それに対して当時の日本は西欧列強の側について中国に出兵し、日英同盟を結ぼうとしていた。そして、「義和団の乱」を鎮圧することを口実にして中国に軍を派遣し、国都の北京及び皇居の紫禁城で略奪・殺人・放火・破壊などはばかりことなく暴行を振るった八ヶ国連合軍に、日本も入っていたのである。

このような当時の歴史的・政治的背景に立脚し、漱石は西洋人の日本人に対するお世辞の本質を指摘した。それは同じ明治34年の『断片』にも見られる。「西洋人の日本を賞讃するは半ば己れに模倣し己れに師事するが為なり其支那人を輕蔑するは己れを尊敬せざるが為なり」<sup>20</sup>という漱石のこの指摘では、「支那人ハ嫌ダガ日本人ハ好ダ」というお世辞の真意にある西洋社会の傲慢さを暴いている。明治日本は西欧世界に師事することによって、自国の近代化と帝国主義化を実現した。このような西洋の言うことなら何でも聞き入れる従順な日本に対して、西洋社会は偽善的な好意で称賛を發したのである。しかも同時に、このような西洋人の下心を見通せず、少しばかりほめられたらすぐ得意になり、西洋

人の中国人に対する悪口を面白がっている日本人の愚かさも、漱石は容赦もなく示しているのである。漱石はこの日記で単に中国のために弁護するだけではなく、今までどれほど中国に世話になったか分からない日本は、ちょっとした利益に乗せられて、恩知らずに親しい隣人と縁を切るほど西欧列強に伍しようとしていると、日本の近代化の問題を指摘している。漱石がこのような批判をしたのは、西洋の近代に学ぶことを拒否し、保守的に復古を主張したのではなく、西洋の模倣ばかりで満足し、日本文化の民族的独立性・主体性を失ってしまうことを恐れたからである。

漱石は少年時代から始めた漢文学の勉強を通して中国文化に触れ、漢籍から文学的・思想的に深く影響され、それによって東洋的な文学概念と価値観を確立した。生涯において英文学の研究者、大学教員、職業作家といった知識人の道を歩んだ漱石は、終始漢文学から得た素養を持ち続け、中国にいつも大きな関心を示していた。このような漱石の中国に対する興味と関心の背景にあるのは、彼の東洋文化と西洋文化に対する比較と、産業的な近代化が東洋世界にもたらした西洋化に対する問題意識である。『満韓』に描かれた中国旅行はこのような漱石の中国像と問題意識のなかで展開されていった。

## 2. 規定された旅行による「先入観」

### 2.1 総裁の意図に定義された旅

漱石の中国旅行に伴っているもう一つの「先入観」を検討するために、まずこの旅の性格を明らかにする必要がある。冒頭でも触れているように、明治42年の漱石の満韓旅行は、学生時代の親友中村是公に誘われて始まったのである。中村是公が当時務めていた満鉄は、日露戦争後、日露講和条約<sup>21</sup>により日本は中国遼東半島および韓国における政治・軍事・経済上の権益を獲得したことにより、明治39(1906)年に設立され、昭和20(1945)年の第二次世界大戦の終結まで満州国に存在した、半官半民の国策会社である。中国東北部において鉄道経営を中心に、炭鉱開発・製鉄業・港湾・農林牧畜に加え、ホテル・図書館・学校などを整備する等、きわめて広範囲にわたる事業を展開し、満州植民地経営の中核となった。本社は大連市であるが、のちに満州国が成立すると満州国首都の新京特別市(現吉林省長春市)に本部が置かれ、そちらが事実上の本社となった。また、東京市麻布区狸穴町に東京支社が置かれた。最盛期には80余りの関連企業をもった。

満鉄の初代総裁には、当時台湾総督府民政長官として植民地行政に実績を上げた後藤新平が就任した。後藤が満鉄総裁だったのはたった2年間しかなく、その後は逓信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市第七代市長を歴任した。後藤の次に第二代満鉄総裁に任命され

たのは中村是公である。後藤は満鉄の総裁となった直後、当時40代の若手の中村を副総裁に抜擢した。中村は後藤の意向で一時関東都督府民政長官となり、同時に満鉄副総裁の事務も取り扱ったのである。後藤が通信大臣に抜擢され、満鉄を去ることになると、中村を第2代満鉄総裁に据えた。中村は満鉄総裁として一番長い5年間を務め上げ、後藤のプランに従って満鉄の基礎をつくった。そして、満鉄時代の後、彼は鉄道院総裁、第九代東京市長、貴族院議員を歴任したのである<sup>22</sup>。満鉄初代と二代目の総裁の履歴から、満鉄を司るリーダーになった人物は、明治日本の植民地支配に携わる官僚から選抜され、満鉄経営者を経てからまた高級官僚として日本国内でも活躍した経路が明確に見てとれる。このように、満鉄総裁になった後藤も中村も、企業経営に携わる実業家よりも国家意志の代表である政治家としての役目が一段と目立つ。

このような満洲植民地支配者としての満鉄初代と二代総裁との交替は、満鉄創立3年目の明治41(1908)年である。そして、中村是公が漱石を訪ねてきたのは翌明治42年7月31日<sup>23</sup>である。予備門時代後、英国留学中の漱石とロンドンでばったり再会して以来、7年ぶりであった<sup>24</sup>。このような是公の招待から始まった漱石の中国旅行は、異国観光を目的にする常識的な個人旅行とはとても思えないわけである。招待の理由について、『満韓』の第一節に「海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て来るが可い」<sup>25</sup>と記している。是公の誘う言葉に出てきた当時の「海外に於ける日本人」とは、彼自身も入れている明治日本の海外植民地の支配と経営に従事している人々にほかならない。「海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て来るが可い」という勧誘の一言で、是公は漱石の中国旅行に植民地事業視察のテーマを与えている。このような是公の来訪と中国旅行の提案理由について、漱石の妻の夏目鏡子はその真意を突き止めた記述をした。

元々この満洲行きには、中村さんがただ、まだ見ない土地に御自分の旧友を連れて行つて、いろいろな風物を見せてやらうといふ思召しだつたのでせうが、其外に自然当時は人がよく知らない満鉄の事業や何かの紹介をやらせようといふことでもあつたものと見えます。しかし自分では別に提灯持ちをする気はなかつたであります<sup>26</sup>。

ここで、是公の提案理由の真意を、設立まもない満鉄の事業、即ち満洲における日本の植民地経営の様子を、当時朝日新聞記者として専業作家の道を歩みだし、文名を確立していた漱石の筆を通して、広く日本国民の間にPRしたいという考えとしてまとめているのである。漱石はこの是公の内心の意向にあまり気が乗らない態度も示されているが、彼の中国旅行は、満鉄総裁の意図による「先入観」によって一般的な異文化体験から離れ、国

家というものに縛られたものである。

## 2.2 「日常」を脱出できない「不完全な異文化体験」

前述したように、満鉄総裁の中村是公の招請を発端とした漱石の中国旅行は、始めから個人的な海外体験という性質から遊離している。明治日本の植民地経営の先兵たる満鉄は、単なる海外に駐在する日系企業としての存在ではなく、植民地における日本の国家権力機関の一翼にもなっている。満鉄の総裁からの招請によって展開された海外視察の活動にも、自然に国家意志が染みわたり、国家意志の枠に限られるようになっていっているのである。国家意志の期待に応えることに漱石はそれほど熱心そうには見えなかったが、彼に近づいてくる異文化の風景は体験者本人の感情を大きく揺さぶっていたのも事実である。このような漱石の中国旅行は、純粋な異文化体験とは一味違うものであり、異文化理解のための「異文化体験」の成立条件としては、これとはまた異なるものである。この点において『満韓』の旅行を考察して見ると、漱石の異文化体験には当然のように限界が現れたのである。このような異文化体験の本質に対して青木保氏は以下のように論じている。

すなわち異文化を体験し、理解しようとするとき、その「空間」と「時間」について考えることが重要な手掛かりを与えてくれる。人々がそれまで身近に親しんできた文化とは違う空間を隔てた、地理的にも異なる場所にある文化を第一義的に異文化と感ずる。そのため、地理的な探検とか旅行が異文化に出会う大きな契機になってきたのであるが、実は時間についても同じようなことが言える。実りある異文化体験に基いた異文化理解の形成に際して、異質な空間と同じように大切なのは、異質な時間というものである。自文化で常に経験している日常の世界と違う非日常の時間を経験することは、異文化体験が成功するもうひとつの要素になるわけである。異文化体験はいわば体験者が自文化における生活者としての日常の時間をいったん遮断して、異文化という異世界の中にもって過ごす、というものである。その間の体験者は、人間であるという意味では以前と変わらぬまま過ごすのだが、しかし社会的、文化的存在としてはまったく違うようになる。異文化における体験者は以前の自分と同じではないし、自文化に戻ったら異文化に入った時の自分とはまた違う。異文化の体験者は、日常的な世界とは違う、非日常の世界に移って生活しているわけである<sup>27</sup>、と青木氏が指摘している。

いわゆる異文化体験が受容者の日常的な体験と特に違っているのは、異文化で流れる異質な時間であり、異質な時間を経験するために、異文化の中に身を置き、異文化に自分を曝け出すことを通して、いつもとは違った体験をするのが必要である、と青木氏の論によって示されている。時間が異質だというのは、別に近代的時間概念による「時差」のことを

指しているわけではなく、時間の認識とか感覚に違う面があることを意味する。本論で取り上げている漱石の満韓旅行では、漱石が満洲で過ごす時間は、中国人の集団との時間であり、この集団と衣食住をともにする時間である。そして、日常の時間、つまり日本に帰ってくると、中国にいた一ヶ月間は日常の時間と完全に遮断された、中国に入る前の日常の時間と出てからの日常の時間に移るまでの、狭間の時間だったというわけである。ここには、異文化の中で日常の世界とは違う非日常の時間が存在し、異文化を理解するうえで、この非日常の時間を体験することが非常に有効である。その時間こそ、その地域や社会固有の文化を知り、異文化理解する上で、非常に重要な要素になるわけである。この意味で、漱石の満韓旅行は目指すはずの異文化理解が「完全な異文化体験」になったのだろうか、観察してみよう。

明治 42 (1909) 年 9 月 2 日に大連に向かう「鉄嶺丸」に乗り、9 月 6 日に大連に到着し、その後一ヶ月間半かかって中国の東北部・朝鮮半島を歩いた漱石は、確かに異質な空間に入った。その異質な空間でどんな時間を送ってきたのであろうか。漱石は自分が乗った船が大連埠頭に着いてからのことを『満韓』で次のように記している。

其処へ脊の高い、紺色の夏服を着た立派な紳士が出て来て、懐中から名刺を出して叮嚀に挨拶をされた。

それが秘書の沼田さんだつた（中略）沼田さんは今度郷里から呼び迎へられた老人を、自宅へ案内される為に、船迄来られたのださうだが、同じ鉄嶺丸に余の乗つてゐる事を聞いて、わざわざ刺を通じられたのである。

ぢやホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話してゐる。（中略）其中に東京の真中でも容易に見る事の出来ない位、新しい奇麗なのが二台あつた。御者が立派なりヴェリーを着て、光つた長靴を穿いて、哈爾賓産の肥た馬の手綱を取つて控へてゐた。佐治さんは、船から河岸へ掛けた橋を渡つて、鳴動の中を突き切つて、わざわざ余を其綺麗な馬車の傍迄連れて行つた。さあ御乗んなさいと勧めながら、すぐ御者台の方へ向いて、総裁の御宅迄と注意を与へた。御者はすぐ鞭執つた。車は鳴動の中を揺ぎ出した<sup>28</sup>。（『満韓』四）

ここで述べられているのは、漱石が9月6日の午後に大連に着いたときのことである。船が埠頭につくやいなや漱石の前に来たのは、是公の秘書を務める「沼田さん」であり、ホテルの馬車を案内してくれた。ホテルの立派な馬車と対照的に見えたのは「鳴動」という中国人が御す汚い人力車と馬車の群れである。中国の土地に着いた漱石は、鉄嶺丸の

「佐治さん」と「沼田さん」の案内で、船から直ちに仲間が手配してくれた馬車に乗って、是公の家へ向かい、地元の間人とも風物ともなんの接触もせずに、異文化における初日を過ごしたのである。

その日漱石が大連大和ホテルに泊まり、お風呂に入っている最中には是公が訪ねてきて、ホテルのことについて是公に「おい此宿は少し窮屈だね、浴衣でぶらぶらする事は禁制なんだらう」<sup>29</sup>と聞くと、是公は「此処が厭なら遼東ホテルへでも行け」<sup>30</sup>（『満韓』六）と言った。漱石が泊った大和ホテルは、当時満鉄の経営下である鉄道・航路沿線に西洋人が快適に滞在するためにできたホテルで、西洋人旅客を招致するとともに、満鉄の迎賓館としての役割も果たした西洋式の高級ホテルである<sup>31</sup>。「浴衣でぶらぶらする事」はそもそも中国にある習慣ではなく、それを求めようとした漱石の泊まったホテルは、その名の「大和」に示されているように、中国風の宿屋ではなからう。また、やや窮屈な大和ホテルと比べて遼東ホテルのほうが一般日本人の生活習慣によりふさわしい宿だと、是公の言葉から分かる。西洋式にせよ、日本式にせよ、いずれも当時の日本国内で見慣れているものである。しかも、大連だけでなく、その後旅順で泊まった大和ホテルのチェーン店、熊岳城の温泉宿、湯崗子の「西洋館」も、ともに「畳を敷いて、日本らしく取り繕つてあつた」<sup>32</sup>宿屋といったように、中国風の宿屋には一泊もとまらなかったどころか、大連から旅順へ赴く列車の中で、同行の橋本左五郎から掛けられた「おい旅順に着いたら久し振りに日本流の宿屋へ泊まらうか」<sup>33</sup>という相談に「さうだな浴衣を着てごろごろするのも好いねといふ同意」<sup>34</sup>を漱石は示している。満洲に旅出した漱石は中国風の宿屋を始終一度も利用しないままであった。

また、食事に至っては、「大和ホテルから持つて来」<sup>35</sup>たもので、「肉刀ナイフと肉匙フォーク」<sup>36</sup>を動かした洋食であったり、旅順で満鉄理事の田中清次郎に招待された「スキ焼」<sup>37</sup>であったりするように、ほとんど中国風の料理も味わえなかったことが判明する。

さらに、前述にあるように、この満韓旅行は満鉄総裁の是公による招待が発端であり、漱石が実に満洲に行ったとしても、是公をはじめ満鉄・日本の満洲における植民地経営の最前線に立つ人々と濃密に接しながらの過ごし方であった。大連には、舞踏会用の燕尾服を貸してくれる「上田君」、夜中まで倶楽部からバーに付き合った上にホテルまで送ってくれる「国沢君」、満鉄事業を詳しく紹介してくれた「川村調査課長」、大連市内見学をいろいろと案内したうえで自宅まで招待してくれた教え子だった股野義郎<sup>38</sup>がいた。そして、大連で邂逅し、大連からハルビンまで旅をともしたものは、かつて極楽水の寺を借りて一緒に自炊生活を送ったり、神田猿楽町の末富屋に陣取って一緒に腕ずもうをしたりした橋本左五郎である。その上、旅順には、是公と同じ予備門時代からの友人であり、当

時旅順の警視総長になっていた佐藤友熊がいた。自分の弟子の坂本雪鳥の兄であり、民政署長官の白仁武もいた。また、旅順でスキ焼を招待してくれた満鉄理事の「田中君」（前出田中清次郎）、二百三高地見学案内の旅順で巡査部長をやっていた「市川君」、旅順港の「河野中佐」などと接した。旅順から一度大連に戻って再び出発したら、熊岳城の宿屋の「御神さん」、営口見学を案内してくれた「清林館主人」<sup>39</sup>、奉天満鉄公所の「俳人肋骨」、撫順炭坑坑長の「松田さん」と技師の「田島君」などと接した。このように、日本人、しかも漱石の知人を中心にした仲間グループに囲まれながらの中国旅行であった。

『満韓』は旧友談にかなりの紙面を占められていることで批判されたが、しかしこれらの旧友をはじめとする仲間の人々は、漱石の満洲旅行とは切っても切れない関係に立っているのである。『満韓ところどころ』を「漱石ところどころ」と評した小宮豊隆も「これらの人々を取り除けば、漱石の満洲は、存在しなくなるに違ひない」<sup>40</sup>と認めた。

このように漱石は異国に出たのは事実でありながら、満洲の土地を踏んだ時点から現地の日本人社会に入り、日本にいるときとほぼ同じような生活をしてきた。接した人は親友、知人、案内係など皆日本人、途中で泊まったホテル・宿屋も、毎日の食事も、日本国内で見慣れているもの、日本人同士だけでの旅をした。漱石は一人で異文化の中に入り込んで、異文化に自分を曝け出したことはなく、日常的時間と違った経験をしたとは言えない。このように日常とは異なった時間とか空間を意識して生活しないと、そこから見えてくる異文化の全体像にもおのずから限界がある。

異文化を理解することは、自文化の殻から抜け出して別の文化の殻の中に入ることなのである。その場所で外国の言葉を話したり、風俗習慣を身につけようとしたりしながら、自分の生活を変えていくことで、それははじめて可能となる。そういう異なった体験がなければ、外国に行っても、どこも同じだったというよくある感想で終わってしまい、異文化理解には歪みが出てくることにもなる。

しかし、こうした不完全な満洲旅行を経験したいとは、漱石は本心から思っていなかったのである。大連に着いてから満鉄事業の見学にさんざん連れられ、所々を走馬灯のように見回った後、是公と一時別れて大連から旅順へ赴く汽車の中で、「満洲に有名な高粱こうりやうの色が初めて眼底に映じ出した。汽車は広い野の中に出たのである」<sup>41</sup>という漱石の視野<sup>42</sup>から読みとれるのは、はじめて満洲の自然景色を満喫した満足感と満鉄事業視察という束縛がない解放感であり、漱石の満洲風物に対する興味深さも覗かせる。

そうした漱石の中国旅行に始終伴ってきたのは、中国に対する二つの「先入観」である。それは、漱石自身の漢文学素養によって作り上げられた幻想的な中国像であり、近代日本の国家意志に決められた植民地たる中国像である。しかし、近代日本に対して深い問題

意識を持っていた漱石の中国認識においては、漢文学の世界への憧れと、植民地主義に染み込まれた印象ということだけで片付けることはできない。中国旅行の展開に従って、漱石の中国に対する理解、誤解および戸惑いがますます高まり、漱石の内心の奥深いところに複雑な中国観の形成を促した。この「先入観」に縛られながら、如何なる不完全な異文化体験を展開し、それでも独自の目線で中国を論じていたのか、今後の分析に委ねたい。

## 注

- 1 中野重治、「漱石以来」、1958年3月5日、『アカハタ』、『中野重治全集』第二十三巻所収、P199参照、1978年、筑摩書房。同じ指摘が現れた論考は、日本では、三好行雄、「夏目漱石事典」1990年、学燈社；中川浩一、「漱石と帝国主義・植民地主義」『漱石研究』(5)：P39-50、1995年。中国では、楊紅、『浅析夏目漱石〈満韓处处〉中的军国主义倾向』（夏目漱石『満韓ところどころ』における軍国主義的傾向に対する一考察）、《时代文学》（下半月）(2)：58-59、2010年；連永平、『从《満韓漫遊》看夏目漱石的中國認識（『満韓ところどころ』から夏目漱石の中國認識を見る）』、『語文学刊』23：P31-32）などが見られている。
- 2 小川直美、「『期待』のゆくえ——『満韓ところどころ』はどう読まれたか」、玉井敬之編、『漱石から漱石へ』、121頁参照、翰林書房、2000年5月8日。小川氏の論考では、商工業者や勤め人、中学、商業学校などの学生を中心とする知識人といった、「満州掌握という国家の意識の反映」であり、「満州経営への参加を夢見る」「成功願望」を抱いている読者群像が形成されている。
- 3 小宮豊隆、『夏目漱石』三（全三冊）、P52参照、1953年10月5日、岩波書店。漱石の満韓旅行は是公以下の旧友の頻出で、「到るところでさういふ人人に会つていれば、満州だの朝鮮だのにゐる気がしないのは無論のこと、時代も明治四十二年から逆に二十年も二十五年も飛んで、自分が大学予備門に通っていた時分の昔に返り、明けつ放しで、やんちやで、勝手に、礼儀作法といふやうなものを超越してしまつても、お互に傷つけられたと感じないで済む、遠慮気兼ねのない、自由な、若々しい青春の夢が帰つて来たやうな気になるのは当然である。その気持がそのまま澁刺と『満韓ところどころ』の上に跳り出る。その意味で『満韓ところどころ』が『漱石ところどころ』になつて居り、然もその漱石が予備門の漱石になつて居るのも少しも不思議ではなかつた。』」という。
- 4 吉田熙生、「夏目漱石 満韓ところどころ」、村松定孝、紅野敏郎、吉田熙生編、『近代日本文学における中国像』、64頁参照、有斐閣、1975年10月30日。
- 5 夏目漱石、「『土』に就て」——長塚節著『土』の序文、明治45（1912）年5月——『漱石全集』第十六巻、P496参照、岩波書店、1995年4月19日。この序文の中で、「長塚君は余の『朝日』に書いた『満韓ところどころ』といふものをSの所で一回読んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一体『朝日』の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである。成程真面目に老成した、殆んど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき『土』を書いた、長塚君としては尤もの事である。『満韓ところどころ』杯が君の気色を害したのは左もあるべきだと思ふ。（略）」といったように、漱石は当時受けた批評を自ら述している。

- 6 この類の論考は、日本では、伊豆利彦、「漱石とアジア——「満韓ところどころ」その他」、『漱石と天皇制』、P247参照、有精堂、1989年9月10日；吉本真、「夏目漱石「満韓ところどころ」論」、『成蹊大学人文研究』、P35参照、2000年3月；黒田大河、「「満韓ところどころ」論——「余」という語り手の感性」、玉井敬之編、『漱石から漱石へ』P128-142、翰林書房、2000年5月8日。中国では、劉凱、《軍国主義语境里的殖民地书写——夏目漱石〈滿韓漫遊〉辮筆考辨（軍国主義的言語背景における植民地描写——夏目漱石『滿韓ところどころ』の中断に対する考察）》、《东北亚外语研究》01:P63-69、2014年；楊雅婷、《夏目漱石〈滿韓漫遊〉中的殖民地书写（夏目漱石『滿韓ところどころ』における植民地描写）》、《世界文学评论》、01：P103-107、2019年などが見られている。
- 7 『漱石全集』、第十二卷「小品」、P592参照、岩波書店、1994年12月20日。
- 8 前出『漱石全集』、第十二卷「小品」、P593参照。
- 9 前出小宮豊隆、『夏目漱石』一、「八 彷徨」、P68-69参照。  
「漱石の家に保存されている二松學舎の免状は二枚ある。その一つには明治十四年（一八八一）七月の日附で「第三級第一課卒業」とあり、他の一つには明治十四年十一月の日附で「第二級第三課卒業」とある。——二松学舎で聴くと、二松学舎では、當時第一級から第三級まであつて、級毎に第一課・第二課・第三課に分たれ、半期に一課づつ卒業する仕組になつてゐたのださうである。第三級第三課では日本外史・日本政記・十八史略・國史略・小學を、第二課では靖獻遺言・蒙求・文章軌範を、第一課では唐詩選・皇朝史略・古文眞寶・復文を、第二級第三課では孟子・史記・文章軌範・三體詩・論語を、第二課では論語・唐宋八家文・前後漢書を教授してゐた。」
- 10 『中国——漱石の漢籍蔵書を見てわかること』、『國文學 解釈と教材の研究』6月臨時増刊号・「特集：漱石——ロンドン、中国などで何が起つたのか」、學燈社、2008年6月。
- 11 夏目鏡子口述、松岡讓筆録、『漱石の思い出』、P213参照、岩波書店、1929年10月15日。  
「十月の中旬に旅行から戻つて参りました。玉やら翡翠やらそんなものを大分御土産に買つて参りました。一体が支那趣味の人で、お金もないので大したものを買へよう筈もないのですが、それでもちよいちよい虎ノ門の晚翠軒あたりへ行つて、何かと買つて来たりして居たものです。随分紫檀が好きで、お盆でも机でも貰入れでも無闇と紫檀を買ひ集めます。それを見て私が、貴方はなんでも紫檀ならいいのでせう。其中には紫檀の机に紫檀の椅子で、何でもかんでも紫檀づくめで、支那のものならなんでも御座れとすましてゐたらいいのでせうが、愛国心のない人だなど申しますと、夏目の方では、お前は又蒔絵だとか梨地だとか、そんな金々塗つたけば塗つたけばしたものなら何でもいいのだらう。蒔絵さへしてあればいいかと思つてゐるが、随分下品なことだなどとけなして居たものです。さうしては紫檀の机につやぶきんをかけて、光沢の出るのを喜んでおりました。」
- 12 『漱石全集』、第十四卷「文学論」P7、岩波書店、1995年8月8日。  
「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文學も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべし。」
- 13 前出『漱石全集』、第十四卷「文学論」P8。
- 14 同注13。
- 15 前出『漱石全集』、第十四卷「文学論」P7。

- 16 『漱石全集』第三卷「草枕・二百十日・野分」P10、岩波書店、1994年2月9日。
- 17 前出『漱石全集』第三卷「草枕・二百十日・野分」P158。
- 18 『漱石全集』、第十九卷「日記・断片 上」P65、岩波書店、1995年11月28日
- 19 「倫敦消息」（『ホトトギス』所収）、『漱石全集』第十二卷「小品」、P14参照、岩波書店、1994年12月20日。
- 20 前出『漱石全集』第十九卷「日記・断片 上」P109。
- 21 条約の内容は韓国における日本の政治・軍事・経済上の優越権および保護権の承認、日露両国軍の撤退期限、遼東半島南部の租借権と長春以南の東清鉄道の清国の同意を得ての日本への譲渡、南樺太の割譲、沿海州における日本人漁業権の承認など、日本史広辞典編集委員会編、『日本史広辞典』P1662、山川出版社、1997年10月22日。
- 22 本論における満鉄および満鉄総裁の概況は以下の資料を参考にして作成したのである。  
加藤聖文、『満鉄全史』、P18-69参照、講談社、2006年11月10日。財団法人満鉄会、『満鉄四十年史』、P12-44および「満鉄関連年表」P517-525参照、吉川弘文館、2007年11月20日。
- 23 中村是公の来訪は漱石の日記にこう記されている。  
「七月三十一日 土 稍涼。早 戸川秋骨来。午後中村是公来。是公トラホームを治療して余病を發し一眼をす。左の黒眼鼠色になれり。満州に新聞を起こすから来ないかと云ふ。不得要領にて帰る。近々御馳走をしてやると云つた。」『漱石全集』、第二十卷「日記・断片 下」P64、岩波書店、1996年7月5日。
- 24 予備門時代後、漱石と是公がなかなか会う機会がない様子は、「中村さんとは大学予備門時代同じ下宿に居たりして中々親しかつたものらしいですが、其後ずつとお会ひしなかつた様子でした。一度ロンドンでお会ひしたとか申して居りましたが、どの道学校を出てから中村さんも夏目も地方生活を多く致しまして、それから夏目が東京へ舞ひもどつた頃には、中村さんは後藤さんの下で台湾に居られ、それから満洲といふわけで、いつも離れ離れになつてゐたのです」という妻の夏目鏡子の叙述からわかっている。夏目鏡子口述、松岡謙筆録する『漱石の思い出』P211参照、岩波書店、1929年10月。そして、同書のついている「漱石年譜」の明治35年のところに、「英京にて旧友中村是公に逢う」という出来事の記録から、「一度ロンドンでお会ひした」のはこの35年であり、明治42の二人の再会の7年前だとわかった。同書P419参照。
- 25 前出『漱石全集』、第十二卷「小品」、P227-228。『満韓』の第一節で中村是公の来訪と漱石を招待する経緯を以下のように記した。  
「南満鉄道会社つて一体何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして、御前も余つ程馬鹿だなあと云つた。是公から馬鹿と云はれたつて怖くも何ともないから黙つてゐた。すると是公が笑ひながら、何だ今度一所に連れてつて遣らうかと云ひ出した。(略)…(余の)気の無い返事を聞いた総裁は、まあ海外に於る日本人がどんな事をしてゐるか、ちつと見て来るが可い。御前見た様に何にも知らないで高慢な顔をしてゐられては傍が迷惑するからと頗る適切めいた事を云う。何でも是公に聞いて見ると馬関や何かで我々の不必要と認める程の御茶代杯を宿屋へ置くださうだから、是公と一所に歩いて、此厩大な御茶代が宿屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるか一寸見たくなつた。そこで、ちや君の供をしてへいへい云つて歩いて見たいと注文を付けたら、そりや何うでも構はない、一所が厭なら別でも差支ないと云ふ返事であつた。」
- 26 前出夏目鏡子口述、松岡謙筆録する『漱石の思い出』P211。

- 27 青木保、『異文化理解』、岩波書店、2001年7月。青木氏の論点の叙述は本書P41-73の内容を参考にしている。
- 28 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P236。
- 29 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P239。
- 30 同注28。
- 31 前出財団法人満鉄会、『満鉄四十年史』、P3-36参照。
- 32 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P330。
- 33 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P277。
- 34 同注32。
- 35 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P250。
- 36 同注33。
- 37 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P295。
- 38 股野義郎は漱石が熊本の第五高等学校教授時代書生として使っていた五高の学生である。
- 39 清林館は、当時急速に増えた日本人滞在に対して、日本軍政署が後援して営口に作られた旅館であり、新市街にあり、経営者は林屋伸太郎である。
- 40 小宮豊隆、『夏目漱石』三（全三冊）P51、岩波書店、1953年10月5日。
- 41 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」P277。
- 42 漱石が橋本佐五郎の同行も伴って大連から旅順へ赴いたのは9月10日のことである。その日の日記で「八時半旅順に向ふ。畠。高粱。粟。蕎麦。赤い濁水の沢。中に玉蜀黍の蘆の如きあり。部落は二三 樹木の間に石垣。画趣。山の景色。墓地。大なるは公牧場」と、沿線の景色を多く羅列した。